今昔
百鬼拾遺
霧
中

百鬼夜行拾遺中之巻目録

紅葉狩

餘五將軍惟茂紅葉がりの时山中にて鬼女にあひしこと謡曲にも見へてよく人のしる所なれバこゝに贅せず

朧車
むかし賀茂の大路をおぼろ夜に
車のきしる音しけり出てみれば
異形のもの也 車争の
遺恨にや

火前坊

鳥部山の烟たちのぼりて
龍門原上に骨をうづまんとする
三昧の地よりあやしき形の出たれば
くわぜん坊と名付しならんか

蓑火

田舎道などによなよな火のみゆるハ多くハ狐火なり
この雨にきるみのゝ嶋とよみし蓑より火の出しハ陰中の陽気か
又ハ耕作に苦める百姓の膏の火なるべし

青行燈

燈きえんとして又あきらかに影憧々としてくらき時青行燈といへるものあらはるゝ事ありと云むかしより百物語をなすものは青き紙にて行燈をはるゆへ昏夜に鬼を談ずる事なかれ鬼を談ずれば怪いたるといへり

雨女

もろこし巫山の神女ハ朝にハ
雲となり夕にハ雨となるとかや
雨女もかゝる類の
ものなりや

小雨坊
小雨坊ハ雨そぼふる夜
大峯かつらき山中を徘徊して
斎料をこふとなん

岸涯小僧

岸涯小僧ハ川辺に住て魚をとりくらふ その歯の利きこと やすりの如し

あやかし

西国の海上に船のかゝり居る時
ながきものゝ船をこえて二三日も
やまざる事あり油の出る事おび
たゞし船人力をきはめて此油をくみほせば
害なししからざれば船沈む是あやかしの
つきたる也

鬼童

鬼童丸ハ雪の中ニ牛の皮を蒙りて頼光を市原野ニうかゞふと云

鬼一口
在原業平二条の后をぬすみいでゝあばら屋にやどりけるに鬼一口に
くひけるよし伊勢物語にみえたり
志ら玉か何ぞと人のとひし時露とこたへてきえなましものを

蛇帯
博物志に云人帯を藉て眠れば
蛇と夢むと云ゝされば妬る女の三重
の帯は七重にまはる毒蛇ともなりぬべし
なまへどもへびる人やきならん
身はくちなはの
いふかひもなし

小袖の手

唐詩に昨日施僧裙帯上
断腸猶繋琵琶絃とは妓女の亡めるを
いためる詩にして僧に供養せしけいせいの帯に
なを琵琶の糸のかゝりてありしを見て傷をいたましく
かなしめる心もすべて女はつみふかき衣裳調度に心を
とゞむへかの小袖より手の出しをまのあたりみし人ありと云

機尋
はたひろハある女夫の出てかへらざるをうらみておりかけし機
をたちしより其の一念
はたひろあまりの
蛇となりて
夫の行衛を
したひしとぞ
自君之出矣　不復理残機と
唐詩にも
みえたり

大座頭

大座頭はやぶれたる袴を穿き
足に木履をはき手に杖を
つきて風雨の夜ごとに大道を徘徊して
ある人これに問て曰いづくへゆくと答ていはく
いつも倡家に三絃を弄せんと

火間蟲入道

人生勤るにあり つとむる時ハ匱しからずと
といへり 生て時に益なくうかうかと
間をぬすみて一生をおくるものハ
死してもその霊ひまむし夜入道と
なりて 灯の油をねぶり
人の夜作を
さまたぐるとなん

今按ずるに
へマムシヨ
よぶハ
ひまむし入道の訛て通じ

殺生石

殺生石ハ下野國那須野にあり老狐の化する所にて鳥獸これに觸れば斃死す應永二年乙亥正月十一日源翁和尚これを打破すと云

風狸
風をうけて巖をかけり
木末のぼりそのはやき事
飛鳥の如し

茂林寺釜

上州茂林寺に狸あり守鶴といへる僧と化して寺に居る事七代也守鶴つねに茶と愛して茶をまうせば いきつくるの事なくしてやまずとて人その釜を名づけて文福と云蓋文武火のあやまりなし 文火とは慢火之武火とは活火なし